

NITRATE (ナイトレート)

映像学科
高山隆一

NITRATE

Department of Imaging Art
TAKAYAMA Ryuichi

制作意図

作品解説

本作品は東京工芸大学芸術学部重点教育研究の一環として制作された。

東京工芸大学芸術学部7学科（写真、映像、デザイン、インタラクティブメディア、アニメーション、ゲーム、マンガ学科）を採り上げ学科を舞台にしたフィクションドラマを制作するものである。本作品は映像学科を舞台にした物語である。

「NITRATE」（正確にはナイトレートセルロース）とは日本語では「硝酸」の意味で映画発明時から1950年代頃までフィルムベースに使用されていた。映写機とカメラのスプロケットに耐えうる堅固なこのフィルムには、致命的な弱点があった。それは過敏なほどの発火性の強い性質を持っていたことである。そのため上映中の映写機停止の事故はランプの高熱がフィルムへの引火を招き映画館の構造も伴って映画史上様々な惨劇を生み出した。

しかし、このフィルムの美しさは現行のアセテートフィルム（不燃性フィルム）の比ではないという証言もたくさん残されている。

本作は美しいが脆く自分で自分をコントロールできず自らの命も奪ってしまう悲しい宿命を背負ったフィルムを若くて美しいが自分をどのように扱っていいのかわからない焦燥の青年期の少女たちに擬えてみた。

あらすじ

卒業制作「シン・ジャンヌ」の撮影をおこなう映像学科4年生女子6名、カメラの由依、録音の朋美、計測の信子、制作の悠里、俳優の玲奈、監督の亜矢と後輩助監督の彩。悪条件の中、さまざまな思いを抱えて彼女たちはクランクアップのラストカットに臨む。

「NITRATE」(タイトル)

再録シナリオ

脚本 高山隆一

登場人物

由依【ゆい】(22) 小山真由・・・大学4年生・撮影担当
朋美【ともみ】(22) 日高七海・・・大学4年生・録音担当
信子【のぶこ】(22) 田澤葉・・・大学4年生・計測、照明、機材管理
玲奈【れいな】(22) ありさ・・・大学4年生・女優(ジャンヌ役)
悠里【ゆうり】(24) 安城レイ・・・大学4年生・美大中退後再入学。制作
助監督、スクリプター、美術
亜矢【あや】(22) 三品優里子・・・大学4年生・監督
彩【ちやか】(20) 高田怜子・・・大学3年生。後輩。悠里の手伝い。
制作兼助監督

結花子【ゆかこ】(40) 渋谷宏美・・・教員(監督)
久美子【くみこ】(40) 島侑子・・・教員(撮影)
女子学生(18) 鷹濱蘭・・・・・・・・大学1年生

① 中庭

由依の瞳。

字幕「行け。勇んで。小ぢき者よ。」

有島武郎」

ナレーション「ジャンヌは全てを受け入れる。味方からの忠誠の証しとしての理不尽な刻印も。敵からの
肉体をえぐられる銃弾の洗礼も。彼女に死は許されない。生きること強いられその代償
として鋼(はがね)の鎧を埋め込まれる。そして彼女は今、兵士としてではなく女としての
辱めを受けるために最高の美を与えられ処刑場へと向かう。」

タイトル「NITRATE」

由依、仰向けに寝ている。

隣で朋美がノートパソコンを膝に置いてデータ整理をしている。

由依、起き上がって『リッドフル』を飲む。

朋美「今朝(けさ)から何本目？」

由依「亜矢のイメージに身体と機材が追いついていかない。本物だね。」

朋美「今頃？ 私天才だって認めるのはキョーブリックとあの子だけ。」

由依「このために私と玲奈はキヤバク三勤め。現役女子大生最後の強み。でもさすが玲奈、オーに半端な
いよ。あれ絶対生まれる前に遺伝子操作やってるね。女としてくにもわあ。あんたも信子はいいよ
ね、家庭教師、がつつり儲けてぞ。」

朋美「そっちのBとこっちのBの問題。」

由依「何それ？」

朋美「ビコータイとブレイン。正しく使ってるだけ。私たち逆は使い物にならないでしょ。」

② フラフラス

機材や撮影道具が散乱している。

クレーンをウエスで丁寧に拭いている信子。

信子、拭きながら

信子「よく頑張ったね。ありがとね。」

③ 映画撮影スタジオ

スクリーン用紙（「シン・シヤンズ」）の整理をしている悠里。

機材に埋もれるようにスタジオの壁に寄りかかって体育座りをして震えている亜矢。

それを心配そうに眺めている悠里。

④ フラフラス

グリップカメラの調整をしている信子。

そばで見ている由依。

由依「本日にそれでやるの？ やっぱシンバル（つかなかっただの？）・・・」

信子「それ、ぶじのカタログシヨウジツグの話？ あんたが早苗と喧嘩したからにんなじになったんだよ。学科一の機材エキスパート蹴飛ばして。」

由依「（ばつの顔そうじ）それはさあ・・・」

信子「そのとはこっちがこっち。いきなり機材管理も任されてこっちもいっぱいいっぱいなの。なんでもわかるわけじゃないんだよ。これお姐さんがなんとか見つけてきてくれた。にんなめっちゃくちゃな撮影で全体の５パーセント程度のじばしで済んでるの姐さんのおかげ。それも役者からみはない。実演のみ。その上、玲奈の機嫌こつたり、亜矢を慰めたり。これだって機材センターの人に頭下げて掛け合ってくれた。それともカメラ、ロープと養生（もちじょう）であんたの身体に縛りつける？」

由依「うめん。」

信子、申し訳なさそうに

信子「こっちこそ。機材どれももちきりきりで。限界。さっきのでクレーン、シヤフトいかれた。あんなに負荷かけて。完全に可動域超えてる・・・。使い方が悪いんだよ。誰もめの子が悲鳴上げてたのわかんないんだ・・・モニターも安定しないし。取説も英語で書いてあればいい方。ドイツ語の取説なんて読めるわけないよ。」

泣きそうになる信子。

見つめる由依。

由依「大丈夫だよ。ずっと一緒にやって来だしじゃん。私がボーンゴッスナイパーで信子は天才スナイパー。

私、信子がいなければ何にもできないよ。」

⑤ 映画撮影スタジオ

悠里が玲奈の背中をペインティングしている。

それを見つめる亜矢。

悠里、見上げて

悠里「どう？ 美大中退は伊達じゃないでしょ？」

亜矢、微かににっこり笑つが不安そうな顔に戻る。

亜矢「姐さん・・・」

悠里「大丈夫、他のも準備してあるから。」

玲奈、突然、亜矢の方を見て

玲奈「あのね、私これに勝負かけてるから。もちいつまでもハッパ見てそんな制服着て巨乳押しつけるわけにいかないの。役者としてきりだから。」

⑥ ２号館階段踊り場

（由依の隣にはロキシーの箱）

廊下の端に座り右膝の曲げ伸ばしをして、膝を抱えながら

由依「あのだ、動くか、動かないのかはつきりしてよ。」

⑧ 中庭

悠里を取り巻いて由依、朋美、信子、後輩の彩（20）が座っている。

悠里「悪いことと良いことがあるけどうちから先聞きたい？」

朋美「良いことなんかあるんだ？」

悠里「今日の日没までに撮り終えて。夜の屋外撮影どう粘っても許可出なかった。」

由依「去年、夜中にパトカー呼んじゃったからね。」

悠里「ワイヤレスのモニター、タッチの差で竹下組に借りられた。ここはBNCケーブルで出すから。」

信子「何メートル必要かわかってんの？」

悠里「私がみんなにお昼出さなかったことある？」

由依「じゃあ、フオーカスは？」

悠里「そこは由依お得意のケタウズで。」

由依「それもー。竹下のやつ、フサイン学科と合点の合点フサインぐしてやったのに。」

悠里「（意地悪そうに）オートフオーカスって手おじわりますか？」

由依「そんなことしたら来代まで学科の笑い者。」

悠里「じゃあ、生まれてくる子供たちのために頑張ってる。」

朋美「一応、良いことも聞いちゃ。」

悠里「これでクワンクアツ。それも日没前に終わる。

（笑いながら）明後日（あさって）まで私の前に現れないで。」

朋美「そういつことね。」

由依「フツのフツは？」

悠里「仮纏上は問題なし。」

由依「えっ、もうやってるの？姐さんの一日って一体何時間あるの？」

信子「機材もそろそろ限界きてて。安定しなくなってきた。今の所、トータは大丈夫。でもモニターや波形が微妙にクワツいてきてる。気温の問題かもしれない。」

悠里「それに由依、3分が限界だからね。」

信子の方を見て

由依「え、なに、バッテリーそれしか保たないの？」

悠里「違うよ、保たないのは由依の膝。」

由依「え、なんで？」

悠里「制作部ナメないで。歩けるだけマシなんじゃない？」

由依「個人情報！」

悠里「インターハイまで出てる個人情報なんてないから。」

由依「でも、根性で行くよ。」

悠里「あのね、知性が伴わない精神論はアクションでしかないから。」

⑨ 屋上

彼女たちを見ている結花子。

そこにやって来て同じように眺める久美子。

久美子「やってるねえ。由依の奴、頭空ける癖直ったかな？昔思いつく？」

結花子「あんなに動き悪くなかった。」

久美子「でも、あんなに繊細じゃなかったでしょう？できますかねえ？」

結花子「できなきゃ、全員留年。でも久々に残す価値ありかな。彼女たち品行（ひんぎん）は悪いけど品性（ひんせい）は悪くない。」

久美子「懐かしいね。卒制。私たちもお嬢様撮影してバカにされて。色々いじわるされて。挙句に校遊業で賞獲ったって言われるし。」

結花子「いいよ。」

女子学生Aがやって来る。

学生「何やってるんですか？。もう始まっているんですよ。先生達いないと男子が勝手にやり出しちゃってん

です。」
結花子と久美子見つめあって笑う。
結花子「まだ校営業いけるかなあ？」
久美子「作品次第でしょ。」
笑い合う二人。

⑩ トリオスタシオ

机を真ん中に置いて向かい合っている亜矢と玲奈。
玲奈「わかったよ、これでいい。」
亜矢、うつむいて不安そうに
亜矢「大丈夫かな？」
玲奈「はっきりに言うけどさ、亜矢、あんた凄いわ。こんな演出誰も浮かばない。しどりたいの私の方が。でも、あんたのダメなどには今回のメンバーが大人だつていい。普通七人でしょ、って言う時は。」
亜矢「・・・」
玲奈「あんたはいい。年毎（としごと）に知識や経験が増えていく。でも私は外見（がいけん）なの。演技派なんて言われたって所詮若い小娘には勝てないの。私の賞味期限はせいぜいあと5、6年。・・・そこちはどんどん増えてくけどこちは減るばかりなのー。ページ12の箱本道に貼になっちゃつー。だからちゃんとやってよー」
亜矢「・・・」
玲奈、亜矢の顎を掴み、
玲奈「もう一度だけ言うこと、亜矢、あんた私たち殺してでもこの作品作んなよ。こっちも覚悟できてるから。」
沈黙の二人。

⑪ フリース

グライドカムを装着する由依。
それを調整する信子。
由依の右膝にスポンの上からテーピングのようには養生テープを巻きつける朋美。
信子「これでいいのかなあ？マニュアル通りにやってるんだけど。」
由依「何年もうじつてなかったんだもの。
そう簡単には行かないよ。
こっちだつてこんなの実習でやってないもん。
これ右腕ちぎれるね（笑）」
朋美、養生を巻きながら
朋美「こんなんでもいいの？」
由依「大丈夫。こっただけ凌（しの）げれば。ちょっと立ってみる。」
信子と朋美が介添えをする。
信子が箱馬を置く。
信子がジャケットの締め具合を確認する。
朋美、近くにあった機材ケースに腰掛ける。
ゆい「去年のMA笑ったね？」
朋美「我ながら由依の下手くそな手持ちとストリングスキーの組み合わせは感心してる。」
由依「視覚は現実の残酷さを見せつけ、聴覚は想像の花を開かせる。」
朋美「由依にしちゃロマンチックだね。録音なんてそう甘くないよ。現場じゃみんなに無視されて。音待ちの時の私の気持ちわかる？ こっちだつてわかっているんだよ。早くしろよって。普通にでると当たり前。アカデミー録音賞の選考基準知りたいよ。」
張り詰めた空気。沈黙。
由依、打ち消すかのようにわざと陽気に
由依「信子さあ、少しオーバー気味に露出する癖あるから目隠（しるかぐ）飛ばさないでよ。」
信子も察し、

信子「そっちこそ、玲奈に見られてっしーム外さほいでよ。」

朋美も察して笑う。

朋美「それにしても似合わないよね。」

由依「グライムカムの似合っ女なんてどうなのよ〜」

不意にスマートフォンで写真を撮る信子。

信子「とりあえず。結婚式の時に流してあげる。」

由依「やめてよね。」

三人が笑い合う。

⑫ ショッピング・機材庫

シートを見ながら電卓を打っている悠里。

机の上にはシートの山と現金。

彩がお弁当とお茶を持って入ってくる。

悠里「採ってた〜」

彩「まだ大丈夫なようです。」

悠里「まあ、何か食くらせとちや文句言わなから。」

彩「なんでもなんでも〜」

悠里「みんなの思ったら根こそぎ持ってかれる。今日中にいれやってみんはから制作費回収しない。あ
いつら今晚、絶対財布、強にするかい。」

彩、机にお弁当とお茶、キヤノンを置く。

悠里、キヤノンを手に取り、

悠里「これ〜」

彩「いいんです。私からの差し入れです。」

悠里「うめん。みんないっまでさせて。現場にいてボールドだけでいいって言ったのに。やっぱタメ制作
たわ。」

彩「こっちこそ、毎日入れなくてすみません。バイトなんつても扱けられなくて。でも、先輩たちの現場
いいですよ。」

悠里「今どうなってる〜」

彩「えっ〜」

悠里「掛け率。知ってるよ、今年は私たちの組だつて。」

彩「(戸惑いながら) 6倍です。」

悠里「いいほうじゃん。」

彩「でも昨日までは3倍でした。」

悠里、笑いながら

悠里「来年、監修やるの〜」

彩「できれば。」

悠里「頑張つて。でもスタッフはよく選んでね。あのやせくれ連、最低だから。」

⑬ フロア

壁の前に座っている由依と朋美。

由依、スプレッドシートを装着して台本を読んで書き込みをしている。

朋美、サウンドトラックの調整をしている。

由依「今頃この奴等、ペンコソルームでみかん飲ってるよ。こっちはいれから極寒のロフト戦線で一戦
交えるんだよね。なんで授業料同じなの？ なんでも〜いっじゃないの〜」

朋美「なにそれ？ 時々わけわからないういっつよね。」

機材の凍結と凍傷がないだけマシ。

私たちはまだいいよ。玲奈はいれから11の真冬の下で裸同然になるんだから。」

由依「こっちが20の丑したら私たち東京灣に浮かぶっつになるね。」

朋美「じゃあ、こっちがローゼンクワント演る〜」

⑬ A 中庭

中庭で一人だけスホットメーターで計測をしている信子。

⑬ B プレイス

先程と同じ壁の前の由依と朋美。

由依「もうこれで終わりなんだね。」

朋美「はあ？ 何お気楽なこと言ってるの？ こっちはこれから勝負だから。あんただってグレートインゲン残ってるでしょ？」

由依「私さあ、走ることにしかやって来なくて。結構自信もあったし。いろんなところから呼ばれて。もしかしいたらなんて思ったこともあったんだ。でも勝てなくて。何にもできなくて。大学だって別にどこでもよくて。映画なんてあんまり観てなかった。ここ出ても別にすることないんだよ。」

朋美「どうすんの？」

由依「今のキャバクラ意外と面白くて。しばらくそこでもいいかなあって。あんなところって思つかもじれないけど皆んないい人たちだよ。」

朋美「まあ、あんたがよけりゃいいけど。でも由依、いけるよ。」

由依「キャバ嬢？」

朋美「そこはとうたかわかんないけど、私の言ってるのはカメヲ。由依のいいよ。好きだよ。自然に構図決めてくる。天性だよ。誰でもできるわけじゃない。みんな言ってる、由依にフィルムで撮らせただかったって。」

由依「いつもバカにされたり、怒られたりだよ？」

朋美「姐さんには止められた。そんなことしたら私たちみんな借金の上に売り飛ばされて一生娼婦か傭兵で暮らすことになるって。でもね、あのころさい玲奈があんたじゃないと撮らせないって。まんまとあんないと思う。あんなのEと私のE。」

由依「今度はE？」

朋美「アイトイヤァ、二人合わせて二二ハソフーズ一人分。」

由依「そこですか。・・・まあ半人前になれただけマシか。」

(間) やっぱもう加速装置はダメかあ。」

⑭ 中庭

玲奈、悠里、彩。

ガウンを被っている玲奈。

悠里、玲奈にデザインされた手錠をはめている。

悠里「きれいよ。」

玲奈「当たり前よ、由依の眼、朋美の耳、信子の知性、亜矢の感性、そしてあんなの無茶振り。私にはじれたから。」

悠里「相変わらずの強気だね。」

玲奈「持つ者が持たざる者に対する礼儀だと考えてるから。」

悠里、玲奈を見つめる。

玲奈「やめて、わかってる、自分も持たざる者の方だとして。天は二物を与えてくれただけ・・・私こっ考えるようにしてるの、乗り越えられるから課せられるって。神の沈黙ってやつ？」

悠里「気分を変えるように」

悠里「ごめん、この寒さ堪えるでしょ？」

玲奈「何？ 今更。そのわりとおとしい雨降らしの時に言っていて欲しかった。あ、そう、男できたら女の友情なんてないから。」

⑮ 中庭

由依、信子に介添されて立ち位置まで左膝を少し引きずりながら位置まで歩いていく。

箱馬を差し出す信子。

何回か箱馬から浮かせたりして二人でチェックしてから信子は太陽の見やすい場所に離れて行く。

亜矢、モニターの前でうずくまっている。

朋美、中庭の椅子に座り体力を温存している。

悠里と彩、階段付近で動線の手エックをしたり、コシを拾ったり、ウエスで床を拭いている。
玲奈は田を描くように歩きながら独り言を言っている。

悠里が亜矢の所へ行き、亜矢の方を抱きながら

悠里「今晚、内緒で制作費ちよるまかしてハイアット取ったから。ゆっくり寝なよ。寝てないんでしょ。」

悠里、朋美のところへ走り去る。

彩、撮影場所を手エックして玲奈のところへ行く。

悠里「近所うるさいから気をつけて。撮影中止になったら泣くに泣けない。」

由依「よくこんな長いケーブルあったね。」

悠里「出所は訊かないで。訊いたら訊いたこと後悔することになる。今日で掛け率倍まで上がったから予想通り。そのためになんかごまかし入れといた。これで制作費元取るからね。でなきや、あと一ヶ月キヤバクつか家庭教師。」

由依「私たちこんなことしてたらいつか地獄に落ちるね。」

悠里「大丈夫、安心して、今がその地獄だから。スタートしたら、あとはみなさん、」亜矢に。信子、どう？
信子、肩にケーブルをかけてカーポートへで太陽を眺めている。

信子「できれば雲に入れて安定させたい。あと一分待って。」

悠里「じゃ、一分後行くから。玲奈、あと一分、我慢して。」

玲奈、何も言わず一点を見つめてる。

玲奈の隣で緊張してボールトを持っている彩。

彩「先輩、あと一分したら行くそうです。」

突然、

朋美「ごめん、救急車ー」

悠里、中庭の中央まで走り階上を見回し、朋美のところに戻る。

悠里「ごめん、救急車ー信子、どう？」

信子「多分、入れば安定する。でも2回目はないよ。」

朋美「こっちも30秒待ってー」

悠里「みんな朋美と信子待ちで。彩、時間もちたないからこっちでもワッシュバードトータカワハター控えとく。すぐボールト打って。」

彩「・・・」

悠里「わかってんの？」

彩「は、はい。」

悠里「返事もらわないとわかんないよ。あと片手でなんてかこいつはなくていいから、両手で確実に。」

朋美、悠里に向かって

朋美「由依、彩、ボールト無理じゃなくていい。ダメなら波形でリッパシメる。」

悠里「行けたらすぐ行くから。ボールトより状況優先でー」

亜矢「由依、マズモ二おかしんだけど・・・。ノイズで殆ど見えない。」

由依「こっちは大丈夫。信子、亜矢の面倒見れる？」

信子「無理ー空が安定しない。雲が速くて読みきれない。インサモ二多すぎる。」

由依「ケーブルかな？」

悠里「やっぱり、バチ当たったか。惜しかった。掛け率、もう少し早ければ12倍までもっていったのに。」

由依「カメラ側は安定してるから今のうちにこのままでもいい。信子、いいよね？」

信子「多分、マズモ二がケーブル。どっちにしても手エックなんかしたら全負凍死する。」

玲奈「彩」

彩「はい。」

玲奈「私たちのこと、覚えておいて。」

彩「・・・」

玲奈「行く。脱がせて。」

彩「でも・・・」

玲奈「いいから。」

玲奈の全身が露わになる。

背中にはタトゥー。

肌の所々には機械のパーツ

悠里「みんな落ちていて。」

由依「こっちは大丈夫、何回も動き見て玲奈の動線把握してるから。最悪なしてもやるよ。できなくておやる。」

信子「これ迷うとちもって難しいかも。」

由依「モニターの結線外すよ。どうせダメならフリーで自由に動きたい。再矢、信じて、絶対外さない。」

信子、思わず空を見るのをやめて由依の方に向かって

信子「ダメだよ、バランス崩れちゃう。できないよ。」

由依「その分、身体の方で修正する。できなくておやる。」

悠里「では、お手並み拝見といきましょうか。40秒で身体に叩き込ませて。」

由依、結線を抜こうとするがなかなか抜けない。

すると、信子の手がケーブルを抜く。

由依「なんで？」

信子「どうせ、やるんでしょ、カメフラやられたら元も子もない。私の就職ダメにされたくない。あんたも連って9社以上回ってやっと勝ち取ったんだから。」

由依「じめん。」

信子「じめんばかりじゃ、世の中通らないからね、ケーブル抜くと前に倒れる傾向になるから気を付けて。もう助けてあげないよ。」

走り去って太陽を再確認する信子。

由依「お待たせしました。」

悠里「由依、でも3分しか保たないからね。」

由依「(笑いながら) 3分もだよ。姐さん、私の保険証が始末書の用意しとして。クレーンの次は多分、私の腕かこれ、運が良ければ腕の方。膝の方はおまけしとく。」

由依、ステレオカムを支えていた箱馬を痛めている右足で蹴り倒す。

顔をしかめる由依。

再矢「由依、そっち行く。画は任せたけど芝居は見たいの。頭空けないでよ。」

再矢、由依の方へ駆けて行く。

悠里「これ乗り切ったら今晚、ヒコーガルドへの目、それも生一」

朋美「鷹虎者は死を迎えるまでに何度も死ぬ思いをする。勇者が死を味わうのは一度きり。あんたたちの馬鹿騒ぎで救急車とくに行っちゃよ。録音いける一」

朋美、椅子から立ち上がり、一発で位置を求める。

信子「天は自ら行動しない者に救いの手をさしのぐない。こっちは安定した一」

玲奈「災いの神よ、腰をあげたな、じつくでも好きならく突っ走れ一」

玲奈目を見開き、前を見る。

悠里「奇跡に出会ったのは瞞しし者のみ。ちあ、再矢、行いこ一」

再矢「勇気とは危機に直面した時に見せる気品。みんな、いくね。ヨーヤ、スタート一」

⑩ エピソードロール (「dragon」をわひる干)

⑪ 中庭

由依の荒い息。

グニャットカムを装着したまま中庭の段差に座り込む由依。

由依「さあ、俺たちの不満の冬の時代は終わった。」

ゆっくりと立ち上がる。

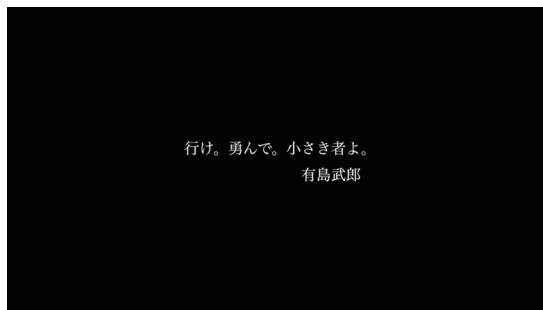
(29分)

ハコヒロ作品

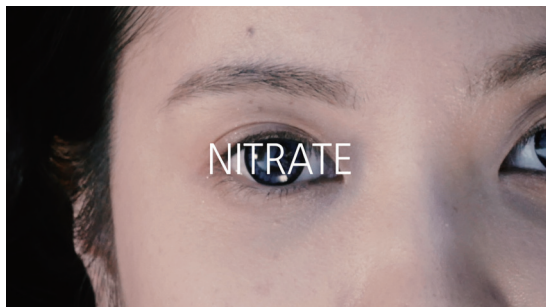
スナコオカ氏



1



2



3



4



5



6



7



8



9



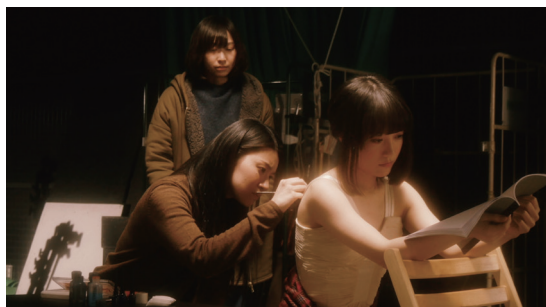
10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



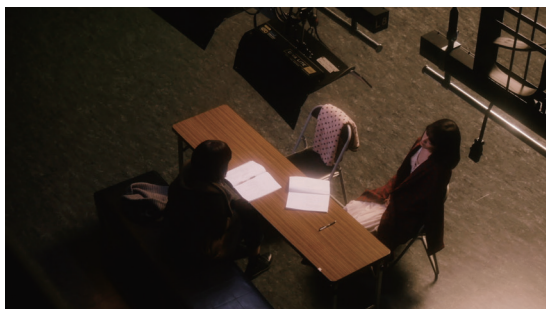
20



21



22



23



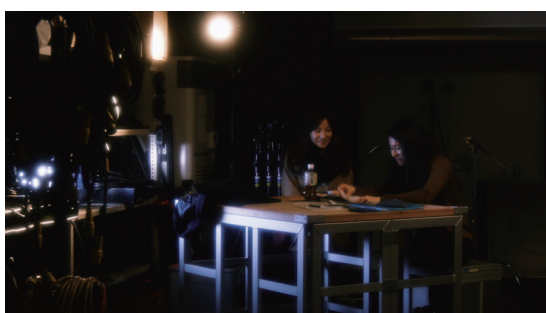
24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



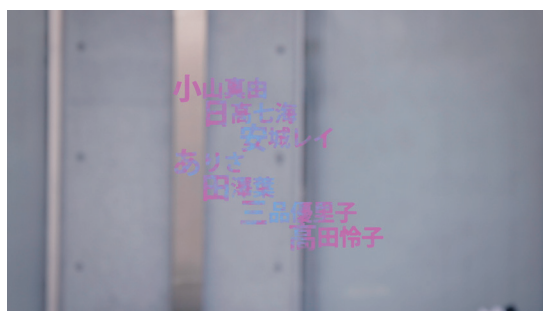
53



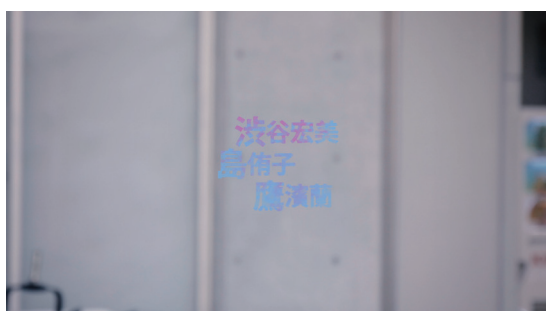
54



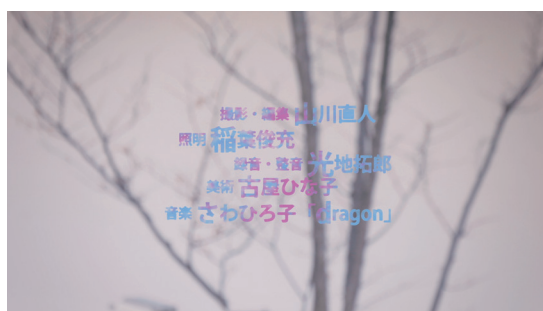
55



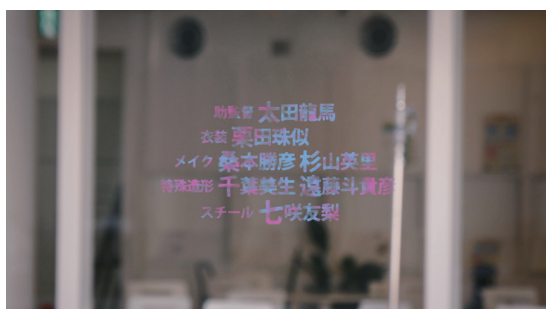
56



57



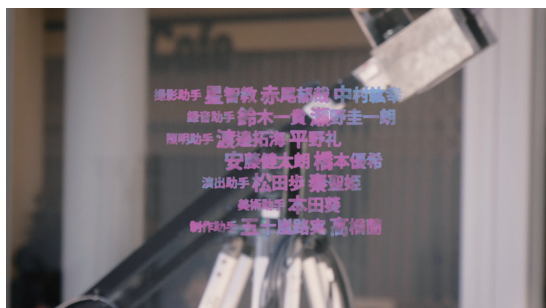
58



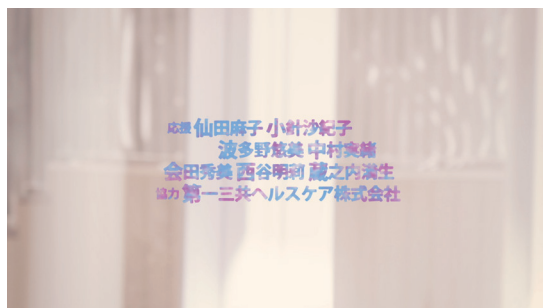
59



60



61



62



63



64



65



66